

特集：日豪交換研修報告

2007 年度日豪交換研修生受入報告

株式会社建設技術研究所 道路・交通部 部長
前田 信幸

はじめに

AJCE の 2007 年日豪交換研修プログラムとして、当社はブリスベンの Arup 社からデービッド マーチランド君を 10 月 11 日から 11 月 2 日までの 3 週間に亘って受け入れた。東京を中心として、コンサルタント業務の水・道路交通・建設マネジメント関連について研修を行い、同時に日本の社会、経済、文化についても同時に親んでもらい、日本のコンサルタントの姿を理解した上で、オーストラリアのコンサルタントのあり方を考えていくことを目的とすることとした。

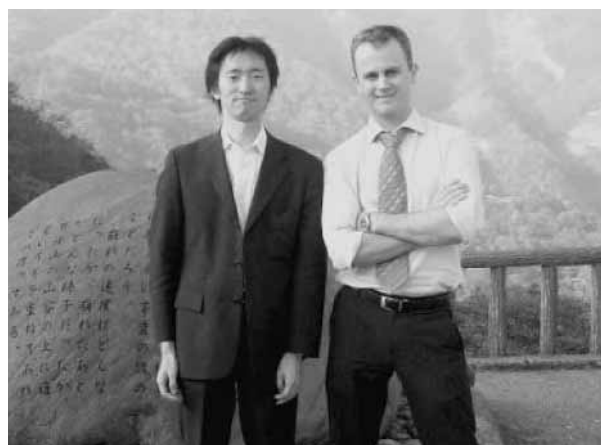
事前研修

これまでとは異なり、今年のプログラムから事前研修なるものが追加され、来日前に日本の姿や日本語についての最低限の学習を行うものであった。初めてのことであったので、試行錯誤しつつ、ダイアログ形式でお互いの国の紹介を皮切りにこの一連のダイアログをプレリミナリーフェーズとし、更に突っ込んだ議論をインテンシブフェーズで行なうように決め、一見完璧のように感じられたが、インテンシブフェーズに入ると日本に来てからやることがなくなる懸念が生じることとなり、事前研修ではあくまでも浅く広く行なうことの重要性に直面することとなった。

道路・交通部での研修

道路・交通部での研修は、4 日間実施しました。道路分野は、David 君の専門分野ではないこともあり、日本の交通状況、道路構造を体感することをテーマにして現場見学を中心に研修を行った。現場見学は、首都高や外環、東北自動車道、東京湾アクアライン等の高速道路見学、ゆりかもめや水上バスといった公共交通見学、いろは坂や山岳トンネル等の道路構造見学を行った。最

終日は、研修の総括として David 君による研修発表会を行った。発表会では、日本とオーストラリアの交通事情の違いについてディスカッションした。Round About と呼ばれる信号が不要な交差点、昼間は片側 3 車線の道路を朝夕のラッシュ時に全面一方通行にして効率的に交通処理をしていること等、日本にない道路事情を聞くことができた。



写真：現場見学にて

水システム部での研修

水システム部では計 4 日間の研修を行った。デービッドの専門が水分野であったことから、デービッドと私たち双方にとって有意義な研修となるよう、ディスカッションの時間を多く設けた。研修では、双方が準備したプレゼン資料等を用いて以下の項目について議論を行った。

日豪における水問題、洪水予測システム、正常流量について、水質浄化事業、リスクマネジメント、水循環モデル、エネルギー政策、公共部門の民営化、等

研修を通じて、日豪の自然環境・社会環境の違いを双方が知ることができたとともに、その環境の違いのために双方において優先的技術課題が異なる部分がある

ことも分かった。そのため、お互いにおいて技術的に進んだ点や、同じような問題で困っている点があることが分かった。また、彼が水分野の専門家であったことから、議論をする中で、われわれの仕事に対し、アドバイスやいろいろな指摘をもらうことができ、双方にとって非常に有意義な研修であったと確信している。加えて、これまでは、私たちの仕事は日本の中でしか評価してこなかったが、外からの視点を加えることで、今の仕事に対してさらに自信をつけることができたことも予想外の成果であった。

さて、研修が成功裡に終了したことは、デービッドの事前研修の努力もさることながら、当部の多くの職員が本研修に参加し、時間を割いてプレゼン資料等を準備



写真：東京湾にて



写真：フェアエルパーティー

してきたことに拠るところも大きいと感じている。英語に不慣れな職員も本研修に参加し、場合によってはプレゼンの発表練習も行い十分に準備を行ってきた。準備を始めたころは、英語に四苦八苦し大変だと思っていたことも、研修が成功したことで、結果的にはその苦労も私たちにとって非常に貴重な体験となった。

最後に、デービッドと今後も連絡を取り合うことを約束し、研修は終了した。

おわりに

日本にはじめて来た彼にとっては不思議な世界の連続であったようであった。非常に礼儀正しく、わけのわからないであろう日本人の名前を必至に覚えている姿が印象的であった。また、感情をストレートに出してくれる面では非常に楽で、寿司を築地で食べている時の御満悦の表情から、納豆を口に入れて苦しむ姿まで様々な表情を浮かべていた。一見ただの遊び人にもみえたが、会議でプレゼンテーションをする眼は、「竜蟠虎踞」という感じを見せていたが、長くは続かないという欠点も有しており、その辺はYPEPで日本に来るにふさわしい感じがした。3週間にわたる研修の中で学んだことを活かして今後も更なる飛躍を遂げてもらうように祈るばかりである。



2007年度 日豪交換研修生受入報告

いであ株式会社 東京支社 水圏グループ
小林雄介

1. はじめに

YPEP2007日豪交換研修の一環として、当社はCostin Roe社のMark Wilson君(以下マーク)を受け入れ、約3週間の研修を実施しました。なお、今回の研修では、より充実した研修とするため従来にはなかった事前研修といった新たな取り組みも行われました。ここでは、事前研修、研修後も含めマークと交流した日々について紹介させていただきます。

2. 受入概要

受入研修生決定まで

マークが専門とする分野は幅広く、舗装設計・排水計画・建築物の維持補修など多岐に亘り、当社の得意分野と重なる部分も多く効果的な技術交流が期待できると考え、彼を受入研修生として希望することとなりました。

事前研修

事前研修ではメールにより、お互いの会社の技術的特徴・労働環境・実際に携わった業務等について幅広く話し合いました。まず、議題をスケジュールにまとめ事前研修の進め方について確認し合い、メールは概ね1～2週間に1回程度のやりとりを目標にしました。

こちらは英語でのやりとりに慣れておらず、また、マークも新規オフィス(Newcastle)へ異動したばかり(そこでは彼がたった1人の社員)で双方、かなりの労力を要しましたが、なんとかスケジュール通りに進めることができました。特に、マークは赤ちゃんが生まれたばかり(生まれてわずか3週間)だったこともあり本当に大変だったと思われれます。今になって振り返ってみれば、研修受け入れ側として確かに大変でしたが、顔は合わせられなくても連絡をとり続けているとどこか

親近感が沸いてくるもので非常に有意なものでした。

来日研修

《出迎え》 10/11にマークを成田空港まで出迎えたのがマークとの初対面でした。やっと会えるんだという期待もありましたが、それよりもとにかく英語が通じるか?しゃべれるのか?という不安で一杯でした。そんな中、遠くから手を振ってくる外国人。「誰だろう?自分に向かって振っているようにも見えるけど・・・」というのも写真とあまりに雰囲気、外見が違っていたので分からなかったのです。とりあえず「Nice to meet you」の挨拶は済ませましたが、やっぱり会話が続きません。何か話さなくてはと思い「写真と全然違うから気づかなかったよ(精一杯の英語でした)」というと、マークは「あー、あれは2年前の写真なんだよね!」などと陽気に笑っていました。私なら、「プロフィールに添付する写真は新しい方がいいかな」などと思ってしまいそうですが、そんな事は気にもしていない様子でした。何かオーストラリア人の朗らかさの様なものを感じとても印象的でした。

《研修開始》 最初の2週間は当社の部署紹介・現場見学・具体的な業務体験等を主な研修内容とし、最後の1週間はヤングサミットの準備を基本とした上で余った時間は自由時間としました。

具体的には日本の地形、地質、火山などと自然災害の関係についての講義から始まり、IT技術、水理解析手法、構造物設計、生物調査とその利用方法、気象予報などの技術紹介を行いました。現地見学先として山古志村、JH静岡施工現場、当社保有の研究所見学などを設定しました。

マークはいずれの紹介、見学にも強く興味を持っていました。英語の得意不得意に関わらず社員が

説明し、マークも様々な質問を投げかけ、活発な意見交換が行われました。このような会話を通して私達も刺激を受け、また、マークにとっても新たな知見を広げられたものと確信しています。

また、実際に「相模川の光ケーブルCCTV設置業務」にも携わり、現地調査、光ケーブル埋設ルート・CCTV設置箇所の検討から図面作成までこなしました。このような業務は幅広い実績を持つ彼にとっても初めての経験ということでしたが積極的に業務遂行にあたっていました。彼の強い意欲が感じられ、こちらにとっても非常に嬉しいものとなりました。

これら技術交流以外にも、宮崎駿ジブリ博物館、サーフィン、ディズニーシー、他の研修生との日光旅行と余暇を充分楽しんでいました。

AJCE主催による京都奈良旅行では他の研修生、各受入企業担当者とともに夜まで飲み、非常に楽しい時間を過ごさせて頂きました。ちなみにマークは飲み過ぎて次の日は二日酔いになっていましたが・・・。

《ヤングサミット》 研修最終日のヤングサミットでは各研修生のこの研修での体験談発表に続き、数人のグループに分かれ、AJCEから各グループに与えられた議題についてディスカッションを行いました。

私のグループは年功序列の賃金制度やコンサルタント業界の転職が議題となりました。ここで出た意見を以下に簡単に整理します。

- ・日本の転職率はオーストラリアに比べて低い。
- ・若手技術者の転職率が低いのは転職後の賃金の下がる人が多いというのが一因である。
- ・転職後も同種の職業につくことが多い。オーストラリアでは転職はキャリアアップの1つという認識がある。

《食事》 マークは殆どの日本食を抵抗なく食しており、生卵をご飯にかけて食べるのは生まれて初めてと言いつつもおいしいと言っていたことと、箸を非常に器用に使っていたのには正直驚きました。ただ、梅干しだけは食べられませんでした。

事後研修

事後研修(オーストラリア帰国後)にもマークと、ヤングサミットの発表内容、感想のとりまとめのため連絡をとりあい、とりまとめ報告をAJCEへ提出しました。

研修受入から体験したもの

マークとの技術交流はもちろんのこと、異なる言語、文化に触れることで日常と違った生活を送れるという点だけでも充分、意味のあるものとなりました。

3. おわりに

英語への不安で始まった研修ですが終了時にはそんな事はすっかり忘れてしまう程、研修生達と親しくなれた交換研修でした。最後に「またいつの日か会おう」と約束しマークとお別れしました。



京都の旅館にて

特集：日豪交換研修報告

YPEP-2007 に参加して

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
社会環境事業部
神田 佑亮

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
社会環境事業部
国際活動委員会 渡津 永子

1.はじめに

今回の YPEP-2007 では、弊社に Katherine Alexander さん(以下、ケイト)、James Disher さん(以下、ジェームス)の2名の研修生を迎えた。

関東支店(東京)にやってきたケイトは、長身で、笑顔がとても素敵な女性技術者である。こちらが恐縮してしまうほど真面目で勉強熱心な彼女は、日本への留学経験を持つロバートを除けば、研修生のなかで最も日本語が上手だったと思う。

関西支店(大阪)にやってきたジェームスも同様に長身であり、まさに「gentleman」の言葉が当てはまるナイスガイであった。



ケイトとジェームス

2.ケイトと過ごした3週間

ケイトと過ごした3週間は、私にとって、いつもとは少し違う緊張感のある日々であった。

特に印象深いのは、ある自治体における市民懇談会に、彼女とともに参加した時のことである。ケイトの同席を思い切ってクライアントである自治体の方をお願いしたところ、「金髪の美人ですか、ならば・・・」と快く迎え



ケイト(左下)に構わず懇談会は進む

て下さった。

1年にわたって開催されてきたこの懇談会は、和やかに議論が進む日もあれば、市民の熱い思いに行政が押され気味になる日もある。ケイトが参加したこの日は、いつにも増して行政側が市民のやり玉にあがるような展開であった。

行政側の意見を代弁したり、ヒートアップする市民の意見を調整しつつ、ケイトがどんな風にもこの場面を見ているのか内心ドキドキしていた。後で聞いてみると、ぴりぴりとした雰囲気を感じ、非常に楽しかったそうである。

ケイトによれば、市民の意見が熱いのも行政がなかなか方向性を明確に示さないのも、オーストラリアも同じだということで面白かった。

もちろん研修の一環として、東京都内や横浜の建物を見学したり、隅田川をくだり、毎日違うランチを楽しみながら、研修期間はあっという間に過ぎていった。

ケイトはその熱心さで、私たちが勧めるどんな日本料理も果敢にチャレンジしていた。お鮓やそば、カレーはもちろんのこと、納豆も平気な顔で食べていた。中でもすき焼きが一番気に入ったそうである。私も食べたかつ

た・・・。

ご飯を食べながら(たまにお酒も飲みながら)、互いの趣味や家族、友人のこと、学生時代の研究、仕事の悩み、今後のことなどいろんな話をした。

私にとってオーストラリアのイメージは、テレビや友人の旅行話、シドニーオリンピックの映像など、限定されたものでしかないことを改めて感じた。彼女が働くメルボルンやキャンベラなどは、地名を聞いたことがある程度でまさしく未知の世界であり、いつかとれるであろう休暇を待ち遠しく感じた。

彼女とした様々な話の中で、やはり気になるのは、オーストラリアでは女性技術者がどのようにキャリアを積んでいくのかということである。話を聞くと、ケイトの会社はなかなか働きやすい環境にあるように感じた。一方、日本の女性技術者の方には申し訳ないが、語彙が限定される分、私の話は少し大げさなことになってしまったように思う。

同じ技術者という点では、仕事のやりがいなど、違いよりむしろ共通点を感じる方が多かった。

3. ジェームスの大阪での研修

一方ジェームスは、オリエンテーションの翌日、昼には東京を離れ大阪に移動した。彼の専門が建築系ということもあり、大阪、東京、同じ日本ながら全く都市形態・建築形態が異なる2つの都市の特徴を焼き付けるため、午前中に六本木ヒルズから東京の都市を頭に焼き付けてからの移動となった。彼が見た大阪の印象は、「張りぼて」であったであろう。御堂筋に象徴される目抜き通りの美しさと、長屋に象徴される密集住宅地。これには驚いた様子であった。

翌日より3週間の研修がスタートした。ジェームスは都市交通分野、構造設計分野に関する国内外の幅広いプロジェクトに携わった。研修を通じ、彼は様々なことに感動を覚えたようである。以下にその一部を紹介する。

大規模な橋梁やトンネルが日本には多い

オーストラリアではシドニーハーバートンネルやシドニーハーバーブリッジなどがあるが、それ以外には大きなインフラはないとのことであった。そのため、橋梁やトンネル設計分野の技術はオーストラリアには集積していな

いようである。

オーストラリアでは数年の実務経験を積んだ後、一度大学院へ戻る

オーストラリアの技術者は大学院に入り直し、主にマネジメントについて学ぶパターンが多いようである。彼の派遣元の会社では、リーダーのほとんどは工学分野とマネジメント分野の Master を取得しており、マネジメントスキルを体系的に学び、実務に活かしているようである。

望ましいリーダーの姿は共通している?

よく働き、よく遊び、よく飲み、メンバーとふれあい、ビジョンを示し行動する姿が望ましいリーダー(上司)と認識しているという。これは世界共通か。

上記は私自身が、日本のコンサルタントの特徴を認識するきっかけにもなった。

4. 大人の修学旅行

研修も終盤に近づいた週末、研修生と共に京都・奈良旅行に参加した。前日の疲れから私は新幹線の中でひたすら眠りこけてしまい、富士山や岐阜羽島近くにある SANYO のソーラーアークを紹介しようと思っていたが始めから大失敗であった。

ケイト以外の研修生と顔をあわせるのは、オリエンテーション・歓迎会以来であったが、同世代の気安さもあり、市内観光、旅館での宴会と、時間が経つにつれてどんどん打ち解けていった。夜のカラオケでは、みんな真面目な顔をして日本語の字幕を目で追っている姿が面白かった。



酔っ払いが写したわけではありませんが・・・



平安神宮の庭園 毎年何人が落ちるらしい

私は学生時代を京都で過ごしたが、住んでいる間はなかなか観光する機会がなかった。ガイドさんの説明は、日本人でも知らなかったことが多く(それが日本の常識ですと紹介されると困ってしまうのだが)、非常に勉強になった。

5. 終わりに

他国の若手技術者との交流を通じて、現在の自分の状況や、日本のコンサルティング・エンジニア業界などを、違う角度から見つめ直すことができた。また日豪の参加者に共通して、技術者としての高い意識を持って

おり、非常に刺激を受けた3週間であった。今後学ぶべきことや、働くフィールドの広がりを感じた。

私とケイト、ジェームスとの共通の課題としては、この経験を「個人として今後の職業人生にどう活かしていくか」、そして「自分の周りにどう波及させていくか」ということである。

これから真夏のクリスマスを迎えるオーストラリアに思いをはせながら、個人のつながりだけでなく、会社や各国協会が交流を深め、次年度以降の本研修の益々の充実・発展に繋げていけたらと思う。

(1. 2. 4. 5 渡津 記、 3. 神田 記)

特集：日豪交換研修報告

YPEP2007 Nathan Scott 氏との出会い

株式会社 長大
 構造事業本部 東日本構造事業部
 名古屋構造技術部 部長 **加藤 雅彦**

株式会社 長大
 構造事業本部 東日本構造事業部
 構造計画 2部 主任 **大山 満弘**

株式会社 長大
 社会計画事業本部 西日本社会計画事業部
 社会・環境計画部 **笠松 扶美**

1. はじめに

筆者(大山)は、AJCE-ACEAの日豪交換研修では来日した豪州技術者との社内交流会に参加したことがあるものの、研修生の受入れを直接担当するのは初めての経験である。今年からは「お客様扱いではなく、より中身のある研修を」という日豪両協会の合意の下、研修は来日期間だけでなく、来日前よりeメール等を通じた事前研修から行うこととなった。受入れ担当自体初めての経験でもあり、今ひとつ掴み所がわからぬまま、受入れを共に担当する同僚と話した結果、「とにかく、形だけの研修ではなく、薄くてもいいから研修生本人が少しでも何かを掴んで帰れる内容を探ろう」、また「我々受入れ側自身も何かを得られる研修をしよう」ということにした。

2. 事前研修

弊社が受入れを担当したNathan Scott氏は、OPUS QANTEC McWILLIAM社に所属する31歳の構造技術者である。初期のメールのやりとり等で来日経験はないとわかったので、事前研修では、同僚が見つけた、日本(&独国)型資本主義とアングロサクソン型市場主義について比較した本を読んでもらうことにした。(実は、英語版と和訳版の両方があるのもこの本を選んだ理由の一つである。)

著者のRonald Doreは英国人であるが、日本に対し非常に造詣が深く、日本に関する著作も多い。Nathan自身この本は大変興味深かったと言っていたが、研修初日のオリエンテーションミーティングで彼のプレゼンテーションを見た他の研修生の中にも、興味を示した人が

何人かいたようである。また、今後いろいろな形でますます海外との交流機会が増えるであろう我々日本人エンジニア自身にとっても、非常に興味深い内容であったと思う。

3. 来日研修

来日中の研修としては、二つのテーマに取り組んでもらった。一つ目は「橋梁の耐震設計基準の比較」、二つ目は「日豪の建設事業の発注・契約方式の比較」である。

一つ目のテーマを選んだのは、豪州自体は地震の頻度は小さいが、豪州とニュージーランドは共通の設計基準を使っている部分があるらしく、地震国であるニュージーランドの基準との比較ができるのではないかと思ったからである。また、当初は耐震設計基準のみの比較を考えていたが、Nathan自身のアイデアにより、地震荷重以外の一般的な荷重の規定についても比較を行ってもらった。このおかげで新たな知見が得られた。豪州では橋梁設計では地震荷重が支配的でない代わりに、潜水橋(洪水時には河川の水中に沈下する橋)が珍しくないため、水の荷重が桁等の設計に支配的となることが多いということである。ところ変われば構造物の設計も変わる。興味深い情報であった。

これら彼が研修でまとめてくれた内容については、弊社内での研修最終日(11/1)に社内の構造関係者の前でプレゼンテーションを行ってもらった。普段は海外のエンジニアと交流する機会が必ずしも多くはない我々であるが、彼我の共通点・相違点などを含め、多少なりとも刺激を受ける機会となったかと思う。

4. ホームステイ

諸般の事情により、Nathanのホームステイは研修地の東京ではなく、弊社名古屋支社のメンバーに引き受けてもらい、自分も同行した。以下、10/20～21の2日間、ホストファミリーとしてNathanを厚くもてなしてくれた名古屋支社・加藤さんからの報告である。

Mr. Nathan Scottのたった二日間の我が家へのホームステイ。名古屋は、大いなる田舎と呼ばれ、遠く江戸の時代から変わりなく質素・儉約、言葉を替えれば地味で堅実でも、いまや東京に負けず劣らず、派手な独特の文化を創りあげている。そんな名古屋をMr. Nathanはどう感じたのだろうか 今回の海外企業研修においてサポーター役の大山氏と共に追ってみた。

現代名古屋考

都市計画、インフラ整備に携わるMr. Nathanにまず見せたのは現代建築の象徴である超高層ビル、セントラルタワーズとミッドランドスクエアビル。Gを感じさせない超高速ELVで最上階まで一気に昇ったが、期待に反して制御技術に関心などみせず、さすがの速度にMr. Nathanも圧倒されたようだ。また、外壁は大型の総DPG貼り、日本のフロート技術のすごさも判ったかなー!?



昨今の名古屋の元気は、やはり自動車の世界的大御所「トヨタ」なしでは語れない。そのルーツであるトヨタ博物館に足を運んでみた。焦土と化した戦後から日本一の工業地帯を築き上げた中部だが、その中枢はトヨ

タをはじめとする中部の製造技術であり、地道に堅実に働く名古屋気質と企業精神が中部の発展を支えてきた。ここにある豊田喜一郎の銅像を前に、創業当時から現代のトヨタグループに脈々と受けつがれているものづくり精神は、「情熱」という無限動力が根底にあることを知った我々は、目と目で明日からのお互いの頑張りを誓いあった!?!のだ。



名古屋城、その風格と美しい容姿は、Mr. Nathanを一発で虜にした。「名古屋城」と達筆で書かれた扇子(英語でfanと言う)をみやげに持たせたが、地元民が恥ずかしくて人に見せられないようなものが、外人にはカッコよく映るのが極めて悔しい思い出である。



ついでに、外堀で売っていた「たこやき(大阪名物と書かれたのれんが少々悲しい)」をはしゃいで食べる姿は特筆ものだ。



我が家での一コマ

Aussie Beef を食べ慣れた Mr. Nathan に、これに対抗して特選国産牛によるしゃぶしゃぶをご馳走した。10年前にPFI視察のため訪れたオーストラリアの思い出話(Kings Cross と錦三はどちらがすごいかなど)を酒の肴に、豪州ワイン / Penfolds はまたたく間に空いてしまった。

気付いてみると、大学2年生になる我が娘は、小学教育論と趣味のバトンの話を、また、高校2年の息子は、野球部について、カタコトの英語で、ちゃっかり逆研修を実施していた!?



Mr. Nathan の好き嫌い

(今後の海外研修生の参考資料として)

: 馬糞の山菜そば、水車、たこやき、デニーズのおもちゃ[電子ギター]、ラグビーW杯、犬の散歩グッズ 等
: 白玉ぜんざい、そば屋のクラシックBGM 等

5. 京都・奈良ツアー

10/27 ~ 28 の京都・奈良ツアーは、弊社では西日本社会計画事業部の笠松さんに付き添いをお願いした。ツアーでの研修生たちの様子を彼女に聞いた。

10月27日午後1時半。新都ホテルに到着するも、知った顔が見当たらない。東京出発組はみんなでランチをしていたらしく、遅刻ギリギリで、バスに乗り込みました。

残念ながら、雨が降ったりやんだりでした。しかも、今日から夜間参詣の始まる寺社もあり、京都は観光シーズン真っ只中。かなりの混雑具合...。しかし、外国人専用ツアーなので、私たち以外の参加者は全員外国人。最初から、ハイペースで写真撮影してました。

Australian たちは、三十三間堂では、1,000体の仏像より先その後に表示されている、お堂の模型や建築の仕組みなどに興味深々。でも、写真撮影が制限されているところが多く、残念そうでした。

最後は清水寺。この頃には、みんな好き勝手に行動していましたが、バスに戻ってきた Australian たちが、片手に缶コーラ(苦笑)。日本人はお団子を堪能していました。



旅館に到着し、宴会タイム!ここで、お昼は気配を殺していたK大先生が大活躍。一気に盛り上がり、、2次会は、カラオケ。最後に日本人で君が代を歌い...残念ながらオーストラリア国家は入っていませんでしたので、オーストラリアで有名な曲をみんなで歌ってくれました。



その後、旅館の部屋で3次会。みんなパラパラと眠りに着く中、最後は3時前まで騒いでいました。

翌朝、朝食に起きてきたのは、昨夜早々に引き上げたメンバーのみ...。Australian4人は集合時間にも間に合わず、タクシーで最初の観光地、二条城まで駆けつけることになりました。。ってことで、今日も遅刻スタートの

ご一行です。

でも、二条城の庭園では、廊下の下にもぐりこんでウグイス張りの写真を撮っていたり、、やっぱり構造物には興味深々の様子。



この日は、ハードスケジュールで、午後からは奈良。相変わらず勝手に行動していたのですが、やっぱりみんなお疲れの様子でした。バスの中では、みんな爆睡(たぶん)。



Australian たちは、たこ焼きがお気に入りの様子。東大寺でみんな食べてました。大阪へ来ればもっと安くてもおいしいのに...

奈良も相当な混雑で、帰りは渋滞。なかなか車が進まず、気がつく、、爆睡。

京都駅に帰り着き、東京組とはここでお別れです。楽しかったけど、、疲れました!

6. おわりに

Nathan は物静かな好青年であった。一緒に受入れを担当する予定だった同僚が急遽海外に長期出張になっ

たり、自身の業務スケジュールとの狭間で半ば放ったらかしのような状態で研修をさせてしまった部分もあったが、そこは同じ構造エンジニア、忙しいのはお互い様と気を遣ってくれたようで、提案したテーマに対して黙々と真摯に取り組んでくれ、必要に応じ鋭い質問をしつつ、短い研修期間ながら成果をまとめ、受入れ側の我々に対しても貴重な情報をもたらしてくれた。

また、たまたま都合が合わず、弊社が携わったプロジェクトの施工中の現場に連れ出してあげられなかったのが残念であるが、研修最終日、先述の社内プレゼンテーションの後、せめてもの橋梁見学ということで隅田川の水上バスに乗りに行った。「橋の博物館だね」と彼が興味津々に写真を撮っていたのが、至らぬ受入れ担当であった自分への救いである。また他社(森村設計さん)からのオファーにより建築の現場を見せてもらい、彼も満足していたようである。

隅田川から事務所へ戻った後、ささやかながら Nathan の送別会を催した。彼の研修中はなかなか彼と会話を交わさなかったメンバーたちも、お酒が入ったこともあってか、言葉の壁など何のその、非常に活発に彼と談笑していた。実はタイミングを外して社内での歓迎会をやりそびれ、それ以降もなかなか一緒に飲みに行ったりできずにいたのだが、これを最初にやっておけば研修中に社内での話し相手が増え、業務以外の部分でももっと内容の豊かな研修にしてあげられたのではないかというのが若干の反省である。次の機会の改善事項の一つになればと思う。



(文責 1~3、6:大山、4:加藤、5:笠松)

特集：日豪交換研修報告

2007年度日豪交換研修生受入報告

株式会社森村設計 海外グループ
今野真希

「Aussieのエンジニアリングって...違うのかな。」というほどレベルの低い、というよりそもそもノン・エンジニアである私が、「大丈夫、どうにかなるから」という社内エンジニア達からの温かい周りの言葉に「騙され」2007年ヤング・プロフェッショナル・エンジニア・プログラム(YPEP)研修生の「メンター」を任されたのは6月のこと。そんな私と数回にわたるメールや課題のやり取りを経て、Robert Spenceleyは森村設計(PTM)にやってきた。彼はオーストラリア・メルボルンにあるSimpson Kotzman Pty.社の機械設備設計エンジニアである。他の研修生の到着より4日早い雨振りの体育の日、「御歳暮」と書かれたTシャツ姿で彼は、無事日本へ到着。

同じ言語を話す者同士でも初対面は構えてしまいがちだが、Robertは相手に緊張を感じさせない不思議な落ち着きと礼儀正しさを持ち合わせていた。見習いたい限りである。彼の日本語は予想以上の高レベルで、レストランの簡単なメニューや駅の表示も理解することができ、「これは一人でどこへ出しても困らないなあ」と、私はニンマリ。

今回の研修では、Robertを「海外グループ(外資系クライアント対応)」の英語ネイティブスタッフの中に座らせるよ、国内グループのメンバーと席を並べて「日本的な」仕事方法を学習してもらおうとした方針が功を奏した。彼は現場見学で様々なものを目にするだけではなく、ドメスティックな設備設計コンサル会社の文化にも触れることができたようである。私の仕事が彼の機械設備設計と直接関係がないために仕事で一緒となることは少なかったが、彼は毎日「今日はこんな現場に行ってきた物を見てびっくりした」とか、「こんな事を学んだ」と報告に現れ、最後にはこちらが教えた通り、「お疲れ様でした」と帰って行った。



以下、彼が研修中に学んだことを抜粋する。

(テクニカル編)

- ・オーストラリアの建築物はコンクリート造りが一般的であるが、日本ではスチール造り。工期を短縮でき、地震に強い。
- ・行く先どこでも空調システムをチェック。特に六本木ヒルズの吹き出しは「カッコイイ」。
- ・技術への追求という姿勢を持つ日本人は素晴らしい。それに対するハードワークを惜しまない。特に省エネに対する姿勢が素晴らしい。

(カルチャー編)

- ・「乾杯!」は宴会の時に言うことが多い。職場の人と帰りに飲む時は「お疲れ様です」という。「ちょっとだけ」とか「軽く一杯」誘うことが多いが、一杯以上飲んでも構わない。
- ・出張に行った人はお土産を買って帰る。甘いものが多い。
- ・日本人が電車の中で寝るのは知っていたが、会社の昼休みにも机に伏せて寝ている人がある。現場の職人さんは床に転がって寝ている。

メルボルンにあるRobertの会社は小規模な設備設計



コンサル会社であるが、PTMもまた YPEP ホスト会社の中で一番小規模である。そのためか彼は始めから違和感なく会社に馴染んでいたようだ。自分の会社にはない自前の CAD スタッフや建築家がいることで、PTMの方が仕事をしやすいのではないかと、との意見を述べられたが、私としては彼の社長が毎週金曜日の夕方に社員へビールを用意してくれ、みんなでそれを飲みながら交流するという方が数段羨ましい。とはいえ金曜日の夕方はまだまだ仕事に追われて目を回しているし、社員数と飲酒量を考えるとかなり非現実的な話ではあるのだが。

こうして Robert の PTM での研修はあまりにも順調に、そしてあっという間に過ぎてしまった。高校時代に大阪で1ヶ月のホームステイを経験していた彼だったが、こ

の3週間の研修を通じてよりよく日本文化を理解することができたとし、何よりも日本のエンジニアリングとビジネス文化を体験することができたことを非常に喜んで

いた。
個人的に仕事が詰まっており、あまりじっくり彼の相手をしてあげることができなかったという反省は残るが、それでも私たちは様々な意見や情報の交換ができたと思う(周囲からは一方的に私が変なことを教えているという指摘もあったが)。彼が無事に帰国し、これを書いている今、正直なところかわいい弟がいなくなってしまうような、ちょっとした喪失感を覚えている(彼は私の弟と同年)。ヤング・サミットのディスカッションのトピックのとおり、Multi-cultural な現代では相手を理解しようとする Attitude や Respect が、言語の壁を越えた交流の鍵となるのであり、彼にとっても私にとってもそれを実感できた研修となったことは間違いない。

最後に。我が社には YPEP の元研修生というオーストラリア人が働いている。日本を(または PTM を)気に入ったからか、翌年戻ってきたそうだ。実をいえば、私には彼に誘われて PTM へ入社したという経緯があり、今回の Robert との出会い共々 YPEP にちょっとした想いがある今日この頃である。

